零崎姫識の人類観察

卯月夕吊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
零崎姫識の人類観察

【Ｎコード】
Ｎ８４１３Ｚ

【作者名】
卯月夕吊

【あらすじ】
殺人鬼集団・零崎一賊の末っ子、零崎姫識。彼は零崎の中でも天才で、普通で、異端だった。妖刀「血濡れの舞姫」を手にした彼の人間関係と、人類観察の物語が始まる。※本作は戯言シリーズ、人間シリーズの二次創作ですが原作にはあまり関わってきません。オリジナル色強めの予定です。

九条千秋

九条千秋は普通の子供である。

京都在住、現在3歳。
親は1歳の誕生日に事故で他界。千秋には親の記憶はない。
また、生まれつきの喉の病気で声がうまく出せない。喋ることは出来るが、大声を出すことは出来ない。
母親が外人で、その髪は日本人とは違うクリーム色。男の子だが、髪は伸ばしている。瞳は茶色。
そのせいで度々女の子に間違えられる。

だが、日常は普通ではなくなった。

血の海が広がっていた。
そこに横たわる人は皆、腹、もしくは背中、もしくは首、もしくは手や足、もしくは頭、その他諸々から血を流している。
黒いスーツにサングラスや、顔に傷跡などから、まさしく”あっち側”の職業だろう男たち。
唯一の例外は、その中に立っている場違いな小さな子供。返り血を一滴も浴びず、ただ男達を見下ろしている。
この場所—よくありがちな倉庫だ—には、濃密な血の匂いが充満している。しかし、それに顔をしかめるでもなく、千秋はただそこに立っていた。
犯人は、千秋ではない。
当たり前だろう。こんな小さな子供に、何が出来るというのか。
千秋は、ごく普通の、重い経歴を持ったただの子供だ。小説によく

ある、実は運動神経抜群の天才最強少年という訳でもないし、勇者の子孫でもないし、チート能力を持った転生者でもない。これから努力をして強くなるアニメや漫画の主人公でもない。実はスーパーマンに変身して悪の怪物と戦うという訳でもないし、外国からのスパイやマフィアといった裏社会の住人でもない。超能力者でもない。人間に見せかけた兵器でもない。
辛い経歴（他人から見れば）を持った、これから超天才を欲しいままにすることになり、将来”覚醒”することがこの時点で決定付けられた、今はまだごく普通の子供である。

「…ありがち」
まるで本当にセオリー通りじゃないか。一体誰がやったのかは知らないが。
千秋はふい、と死体から目を逸らした。かなり冷静、というよりは状況が分かっていない、と言ったほうが正しいか。この年代はまだ、夢と現実、テレビの中の世界と現実の世界の出来事の区別というか、そういうものがついていないところがあるだろうから。
てくてく、と薄く扉が開いた倉庫の出入り口に行こうとした。が。
『気に入った』
不意に聞こえた声に、千秋は立ち止まる。そして後ろを振り返る。
「だれ」
そこにはもう既に息絶えている男達しかいないはずだ。しかし、いつの間に現れたのか、そこには少年が居た。
髪から服から、黒一色の少年だ。肌の色だけが異様に白い。まるでモノクロだ。その顔は無表情。
『この光景を見て物怖じしないとは興味深い。お前、力が欲しくは無いか』
「…あやしい」
誰だってこんなことを言う少年を見たらそう思うだろう。
『疑うのも無理は無い。それに、訊くまでもなかった』

「…はなしがかみあわない」
少年は1人で喋っているかのようだ。
「けっきょくなにがいいたいの」
『お前を気に入った。私を使役して見せろ、九条千秋』
少年は千秋の目の前に一瞬で移動していた。モノクロの、無感情の瞳が千秋を見下ろす。千秋は驚きもせずにその姿を見上げる。視線と視線がぶつかる。どちらも無表情。
『拒否権はない。私は、その時1番気にいった者の傍にずっといる。お前を今、最高に気に入った。その素質に』
「そう」
両者の瞳は、読めない。静寂だけが、場を支配する。
「しえきしてあげてもいいよ。きみがやくにたつのなら」
『主と認めた者の傍に、私はずっといる。お前の命令なら、例外以外従う。それに』

『お前は死ぬことが無くなる』

千秋が、初めて驚きを見せた。そして、にやりと、口端を吊り上げる。
「いいよ。しえきしてあげる。僕が今日から、お前の主人だ」
『契約は成立した。いいように私を使え』
少年の姿が掻き消えた。少年が立っていた場所には、およそこの場に似合わない剣が突き刺さっている。
装飾は豪華だ。実際の戦闘には到底使えなさそうに見える。しかし、その威圧感は普通ではない。
『かつて私は妖刀と呼ばれた。魔剣と呼ばれた。悪魔の器と呼ばれた』
千秋は剣に、手をかける。

『主の血によって覚醒し、主の死によって真の力を見せる。今まで、使役者は数多くいたが真の力を引き出したものはいない。お前が始めてだ、九条千秋』
するりと、千秋の手によって剣は引き抜かれる。

『我は”血濡れの舞姫”と呼ばれた剣。その名の通り、紅く染まり舞うように仇なす者を斬る剣。お前の血を受け私は舞うだろう』

玖渚友

九条千秋は天才である。

彼が「血濡れの舞姫」を手にしてから2年後、丁度5歳で、アメリカはテキサス州ヒューストンにある「ＥＲプログラム」への主席入学を果たした。

学術のさい果て、と呼ばれる「ＥＲ３システム」の留学制度が「ＥＲプログラム」。世界各国の頭脳が集結するだけあり、「ＥＲ３システム」は相当の頭が切れる人物でないと参加することはできない。

その若手育成プログラムである「ＥＲプログラム」もまた然り、だ。全世界からエリート候補生が集まるだけ集まるのである。そこに弱冠5歳にして主席入学。当時は「ＥＲプログラム」始まって以来の天才であると囁かれた。

だが、更に異彩を放つのは、千秋の感覚である。

募集要項には《一切の特典なし。将来の保証もしない。死して屍拾う者なし。得られるのは確かに知的好奇心を満足させうる環境のみ》とある。この募集要項を見て集まってくるのは、「ＥＲ３システム」と同じく“何より学習することが、どれよりも研究することが大好き”という意味で頭の切れた人ばっかりなのである。

しかし、千秋にそんな感情は一切無い。“ただ入れそうだったから”という理由で、「ＥＲプログラム」を受験し、見事主席で入学したのだ。

日本には飛び級制度はない。だからこそ、千秋は海外の「ＥＲプログラム」に目をつけたのである。

他の受験生や「ＥＲプログラム」の先輩、「ＥＲ３システム」に参加する人々を侮辱して入学したと言っても過言ではない。

が、それが普通ならばいじめの対象となったり、周囲から疎ましく思われたりする要因になるだろう。しかし、ここ「ＥＲプログラム」

ならびに「ＥＲ３システム」では全くそんなことは無かった。元々の集まる人々の、基本的なルールがあるからだ。
ともかく、そういった経緯で「ＥＲプログラム」に入学した千秋だが…今度はそれを普通１０年のカリキュラムを、３分の１以下の３年で卒業した。
これには、あまり日本での知名度が高くない「ＥＲプログラム」と言えども、日本でも大々的に報道された。
『天才少年、世界の超難関教育プログラムをたった８歳、しかも３年で卒業！！』という具合に。
だがこれにもまた、千秋は関心を示さなかった。どうでもいい、の一言で千秋は片付けてしまった。
その後、２年だけ「ＥＲ３システム」の研究機関へと所属。その間、「世界の答えに最も近い七人」七愚人へと加わってくれないかという打診が何回も来た。しかし、千秋はこれを断固拒否。そして、周囲の人間に惜しまれながら「ＥＲ３システム」を離れ１０歳の時に日本に戻った。

千秋が特に得意としていたのは、電子科学、機械工学といった機械関連の科学だった。その方面では、千秋は一躍有名人になっている。でも、千秋はどの学問もそつなくこなした。得意科目が機械関連の科学といっても、他の方面に進んでも充分その研究で稼いでいけるだけの頭脳は持ち合わせていた。
千秋がその技量を持ちながら電子科学、機械工学に進んだのは現在、日本はＩＴ化が進み、そういった機械関連の仕事は稼ぐのが容易だと考えたからである。
そして、その技量を養った千秋は、日本に戻ったのだ。

日本に戻って１日。東京のホテルに宿泊していた千秋の元に１人の男性がやって来た。

「失礼、玖渚機関の者ですが」
「『玖渚？』」
千秋は手元にある端末を操作して喋った。
血濡れの舞姫を得てから7年の月日が経っていた。その間に生まれ持った喉の病は進行し、ついに手術をした。しかし、その手術中の事故により、千秋は声を出すことが出来なくなっていた。
彼は人口音声を使うことでしか、会話が出来ない。握っている端末は千秋が独自に開発した人工音声の端末。そのため、機械独特の雑音は綺麗に消されているものの声には抑揚が無い。
「『玖渚とは、あの？』」
「ええ。私はその、使いの者です。実は、玖渚直様があなたにお会いしたいと」
「『玖渚、直？それって、機関長の秘書の玖渚直ですか？』」
「いかにも」
玖渚機関は、この国の人間ならば1度は聞いたことのある名前だ。いくら天才と呼ばれていても、その偉い人が自分に何の用か。
「お時間はございますでしょうか」
「『特にこの後の予定は決めていませんからね…分かりました。一緒に行きましょう』」
「恐れ入ります」
使いの者は、深々と頭を下げた。

直との面会は、普通に終了した。ただ直が普通にお世辞的なことを言って、ヒューストンでの話を聞いただけだった。
千秋も普通にそれに答えた。別に聞かれて困るような話でも、ない。しかし、最後に直は千秋に1つお願いをした。
「高貴なる私の、高貴なる妹に会って欲しい」と。
玖渚直の妹といえば、1人しか居ない。千秋と同い年の、玖渚友。丁度友は京都、城咲のマンションに住んでいると聞いた。
数日後。京都に着いた千秋は、早速玖渚友が住むというマンション

に向かった。

「うにー。直くんが言ってたＥＲ３の天才くんだよねー？入って入って、うぇるかーむ」

マンションを訪ねて、玖渚友に会った時に言われたのはそんな言葉。中はコードだらけだ。足の踏み場もない。なんとか歩ける場所を探して、友の後についていく。

途中、仕事場というか、パソコンが置いてある部屋が見えた。玖渚機関の力か、随分いいものを持っているようだ、と千秋は思う。

千秋は、日本に戻ったら技術屋でもやろうかと考えていた。プログラムは特に得意な分野だし。パソコンについては誰よりも詳しくなったんじゃないかと自負している。

ようやく、居間のような部屋に辿り着いた。千秋は先に座っていた友の正面に座る。

「直くんから連絡があったんだよねー。有名な天才くんが、僕様ちゃんのとこに来てくれるよう手配したってさ。お話だけでも聞かせてもらえって」

「『そうなんですか』」

一応、絶縁されているとは言っても玖渚直系だ。千秋は一応、敬語を使う。

「かたいかったーい！僕様ちゃんのことは友でいいよん！あ、とゆーか自己紹介してなかった」

友はにこっと笑った。

「僕様ちゃんは玖渚友だよん！」

「『僕は九条千秋です。もっとも、父親が外国人でして、アメリカではクレア・クラウスと名乗ってましたけど』」

「だから、かったいよっ！同い年なんだしー、僕様ちゃんのことは友でいいって！Ｔ・Ｏ・Ｍ・Ｏ！フレンドの友だよーん。あと敬語もなしで！」

「『…これでいい？友』」

「うんうん！僕様ちゃんはちぃちゃんのことちぃちゃんて呼ばせてもらうからねっ！」
千秋、だからちぃちゃんなのだろう。友の明るさに最初はついていけなかった感がある千秋だが、もういいやと思うと慣れた。
「それよりー、その人工音声！ちぃちゃんの自作なんでしょ？ちょっと見せてー」
「『いいよ』」
友は早速人口音声をじっくり観察し出した。
「ふえー、面白いよっ！ボタンの配列がまるでぐっちゃぐちゃだね！ふつーならこんなん使いたくても使えないよっ！ぐっちゃぐちゃすぎて、どのボタンでどの言葉かぜーんぜん意味分かんないもんね！」
「“慣れちゃえば使うのは楽だよ。それに、それ設計から組み立てから何から何までやったの僕だから”」
千秋はもしものために常備している会話用メモを一枚出し、それに言葉を書いた。
「なるほどねー、うんうん、参考になったんだよ！」
友は笑顔で人口音声の端末を千秋に返す。
それから2人は、機械工学のことについて—主に千秋の「ＥＲ３システム」の話だったが—をして、すっかり仲が良くなった。

血濡れの舞姫

九条千秋は殺人鬼である。

きっかけは他でもない、あの血濡れの舞姫を手にした時からだ。

血濡れの舞姫というのは、元は日本の刀ではない。というか、刀ですらない。

この武器については、どこから見つかったのかも分からない一冊の文献に詳細が書かれている。

妖刀、魔剣、悪魔の器、その他色々な名前で呼ばれる血濡れの舞姫だが、本当の名前はない。千秋は、略して舞姫と呼んでいるが、それは勿論のことあだ名であり、血濡れの舞姫という名もまた、本来の名前ではない。

文献によれば、この剣についての伝説が書かれている。

昔、とある小国。その時、その国は領土を広げるために周りの国と戦争をしていた。

その国には1人の王子がいた。

王子は圧倒的なカリスマ、類稀なる武の才能、天才と呼ばれる頭脳を持った王子だったという。

その王子は指揮官としてではなく、王の命令に従い、兵を率いて国の領土を率いるために常に最前線で戦った。

その姿は舞うように美しく、敵も味方も魅了した。浴びた返り血さえも美しく。その場にいたものを余すことなく、惹きつけた。

人々は王子を、こう呼んだ。

「血濡れの舞姫」。

だが、戦を続けるうちに王子は狂っていった。彼は、血に魅せられ

たのだ。
彼の殺人衝動は日に日に高まり、敵を殺すことにどんどんのめり込んでいった。
味方には手を出さなかったが、戦場での彼の戦いぶりはどんどん苛烈に、残酷に、非情になっていった。
そんな折、王が死んだ。王子は亡き先代の王に代わり、王となった。王子が王となってからでも、隣国との領土の奪い合いは続いた。王は自ら先頭に立ち、戦いの場へと駆けて行った。
彼が戦場に立てば、国が敗北することなどはなかった。また、王は政治も出来た。
国民は王の殺人衝動は気味悪く思っていたが、何よりそのカリスマにより、王に従った。
やがて、小国は立派な大国となっていた。だが、それでも王は飽き足らず、周りの国と戦争を開始した。
そこでも勝ち続きだった。まるで敗北など、王は知らなかった。王の武と策により、周りの国は見る見る倒されていった。
周りの国の王や将軍は、王を「死塗りの狂王」と呼び、恐れた。
いまや誰も、王に敵うものはいない。
だがしかし、ある国だけは違った。その国は王を罠にかけた。王らしくない失態で、王は捕らえられた。
王は殺された。公開処刑だった。
しかし、王が死んだ次の瞬間、王を殺した兵がかっと目を見開き、叫んだ。
『私の魂は決して死ぬことはない！私は永遠だ！肉体は死しても、我が魂は死なぬ！そして私に仇した者よ、その命、無いと思うがいい！』
そして兵はその場に倒れた。兵士は、既に絶命していた。
処刑した国の王と国民は王を恐れた。急いで王の魂を、1本の剣に封じ込めた。
それから恐れのあまり、王の国の国民を1人残らず殺した。国は事

実上滅びた。
しかし、その1年後には、滅ぼした国に原因不明の病が流行し、その国もまた、滅びたのだという。
それから、王の魂が封じ込められた剣は、滅びた国を偶然訪れた旅人に拾われ、その旅人から別の人間へ、そしてまた別の人間へ、というふうに渡って行った。
その剣は、こう呼ばれた。「血濡れの舞姫」と。

最初この話を聞いた千秋は「バカバカしい」の一言で一蹴した。
信じられるか、とばかりに。
しかし、その話を裏付けるかのように、血濡れの舞姫には大きな特徴があった。
まず、定期的に殺人衝動が起こるという事。それは血濡れの舞姫が血を求めるからだ。また、他人の血を浴びれば浴びるほど、血濡れの舞姫の切れ味は増す。
次に、戦闘能力、学力、カリスマ性の面で補正がつくという事。簡単に言えば戦闘能力などが増すのである。千秋が「ＥＲプログラム」に主席で入れたのも、これのお陰と言ってもいい。（あくまで”主席で”ということを間違えないで頂きたい。千秋はそのままでも、このまま「ＥＲプログラム」に入学してしまうくらいの学力は持っていた。）
そして、特筆すべき事項は、”血濡れの舞姫は使い手の血を浴びると覚醒し、持ち手の戦闘能力と血濡れの舞姫の攻撃力がさらに増大する”ということである。
血を浴びれば浴びるほど切れ味が増す剣。それが血濡れの舞姫。しかしあくまでも自分＞他人だ。
攻撃力は一旦覚醒状態が解除されれば元に戻るが、大人数を相手にした時、相手が千秋を傷つけた時に相手の方が不利になるということが分かるだろう。

もう1つだけ、これが最上の特徴と呼べるものがあるが、今は控えておこう。

ゆえに千秋は殺人鬼なのである。
だがまだ、”あの名前”は持たない。
まだあの家賊と会うのは、少し先の話なのだ。

零崎姫識

九条千秋は零崎である。

玖渚友と会ってから数日後。
今はもう、親戚の家に居候していない。友にお願いしたら「そんなの簡単だよ！」と言って、千秋が指定した土地に家を建ててくれることになった。
もちろん友にしてもらうのは手配だけ。お金は千秋持ちである。
「ＥＲ３システム」に居た頃に、既にコンピュータ関連の仕事はしていたのである。そのお陰で、お金はたっぷりあった。親戚への仕送りなどはしない。
その家が出来るまでは、こちらも友が手配してくれた古くも新しくも無い平凡なアパートで生活している。

今日、千秋はとある古いオフィスビルに来ていた。
ここには、所詮は表世界の裏社会のヤクザがいる。聞いた話では、麻薬販売などをしているらしい。
もちろん、地域の住人はそんなこと知らないだろう。だが、古いオフィスビルの前に見慣れない子供が立っているというのは、変な光景でもある。まあ、誰にも見られていないが。
千秋は普段着だ。オレンジ色と茶色のパーカーに、普通の長いジーンズに運動靴。子供の時から伸ばしている髪は、背中の中ほどまで伸びている。結んでは居ない。
千秋は無造作にポケットに手を突っ込み、そこにあるものを確かめてからオフィスビルに入った。

黒スーツの見るからに怪しい集団が、部屋の中に１０人ほど。部屋の中はタバコと酒の匂いが充満している。

その中に、千秋は堂々と入った。
「あぁ？何だこのガキ」
一番近くにいた黒スーツが、入ってきた千秋を見下ろす。
「おいガキ。どうやってここに入った」
千秋は答えない。
奥にふんぞり返って座っていた黒スーツ―恐らくまとめ役か何かだろう―が千秋に近づいた。そして、吸っていたタバコを千秋の顔すれすれまで近づける。
「おっさんたちは気が短いんだ、さっさとどうやって入ったか教えろ」
「『答える必要はないから黙ってるんだけど』」
「…このクソガキ。綺麗な顔に傷つけたろーか」
「『あんたら、弱いね』」
千秋は目にも留まらぬスピードで、ポケットに入れていた手を振り上げた。
手には、ナイフ。しかし、装飾は派手で豪華。
「なっ！？」
男が驚くのも無理はない。振り上げられたナイフは正確に、たばこの先端を斬っていた。
「『ということで、じゃあね。恨むんなら、こんなことに足を突っ込んだ自分を恨むといい』」
瞬間、ナイフが伸びた。ように見えた。
それはもう剣と呼んで差し支えない長さだ。あの時千秋が引き抜いた、あの剣の長さだった。
「『バイバイ』」
断末魔が、響いた。

数分後。そこは、地獄絵図だった。
生きている者はいない。皆、ぐちゃぐちゃのバラバラにされていた。

床は血の海。テーブルや椅子、壁には返り血が凄まじく飛び散っている。
千秋も返り血を浴びていた。その手に握る血濡れの舞姫もまた、血で赤くなっている。
ひゅん、と千秋は1回、血を払うように剣を振った。血が壁に飛び散る。
しかし刀身は、赤く輝いていた。まるで、血を受けて喜んでいるかのように。
千秋はまた血濡れの舞姫を一振りした。そうすると、剣だった血濡れの舞姫は、今度は黒い大きなコートに変わった。
これも、血濡れの舞姫の特徴なのである。主の思う姿にその姿を変える事の出来る、変幻自在の武器。
千秋はまるで何事もなかったかのようにその黒いコートを着る。返り血まみれではもし誰か会った場合怪しまれる。
すっぽりと、そのコートは千秋の全身を覆った。地面につくかつかないかという、絶妙な丈の長さだ。
ふと、そこにパチパチと拍手が起こった。千秋は驚いて後ろを振り返った。見ていたならば、口止めしなければ。
「素晴らしいねえ。その年にしてここまで残虐に冷酷に…何より普通に人を殺せるとは、驚きだよ」
うふふ…と笑いながら、その男は言う。
随分と日本人離れして背の高い男だった。しかしその体は痩せていて大柄とはいえず、その手足の異常な長さからまるで美術室の針金細工のようなシルエットである。背広にネクタイ、オールバックに銀縁眼鏡というごく当たり前の、ごくごく当たり前すぎるファッションが、驚くくらいに似合わない。
「その武器は君のかい？随分と君は面白い武器を持っているんだねぇ…私はまだ自分の武器と呼べるような物すら持っていないわけだが。アスやトキと違ってね」
ようやく、男は拍手をやめた。

「うん？変なことを聞かせてもらうが、君は男の子かい？それとも女の子かい？」
「『…男ですけど、針金細工さん』」
「男か…いやいや残念。なかなか整った顔立ちだから、女の子…つまり私の妹になるのかと思ったのだが、どうやら違うようだね…残念残念」
怪訝そうな目を、千秋は目の前の針金細工に向けた。
「おっと、すまない。気を悪くさせちゃったかな？それはすまなかった。女性の零崎というのは少ないものでね…つい期待してしまった。いや、恥ずかしい」
ますます千秋は、怪訝そうな目で針金細工を睨んだ。
「君くらいの少年が睨んでも、別に威圧感は与えない、ということを分かっているかい？そういう目をしたって今の君じゃあ可愛いだけだよ。だからといって私は別に止めはしない。なんたって可愛いからね。弟でも君のような中性的な顔立ちなら、私は大歓迎さ」
「『単刀直入に聞きます。あなた、いつから見ていたんですか？』」
ん？というように針金細工は千秋を見た。
「…ああ、口が動いていないからどうやって喋っているのかと思っていたが…この機械音、何かそれ専用の機械でも持っているのかい？」
「『質問に答えてください、針金細工さん』」
機械の音声は当たり前に無感情だ。千秋の、針金細工を見る視線が鋭くなる。
「ほうほう、中々の殺気だ…っと、すまないね。質問、質問…ああ、私がいつからここにいたかということだった」
針金細工は睨まれても飄々としている。
「私がここに来たのは、丁度君に最初に近づいてきた男に君が剣を刺したところだ。まるで迷いの無い太刀筋だった。いやあ、ビックリしたよ。随分手馴れた手つきだったねえ」
「『そりゃ、7年も前からヒトゴロシしてれば嫌でも』」

「…うん？」
針金細工の顔が驚きに染まった。
「『何か変なこと言いましたか？』」
「まさか、まさかまさかまさか…7年？それは本当かい？だって君、どう見ても小学生…最高で小学校高学年ほどにしか見えないのだが？人識と同い年くらいだ。それで、7年？私を騙そうとしているのではあるまいね？」
「『初対面の人を騙して何になるんですか？そんな悪趣味じゃない。それに、１つ訂正しますが僕は１０歳、普通の義務教育に従っているのなら5年生になり立てです』」
「ということは3歳から、かい？…こう聞いちゃあなんだが君は人間かい？」
千秋は頷いた。
「人識ですらまだ覚醒してはいないのに…一体何なんだこの子は。たった3歳で覚醒？それに子供でありながらあのような手馴れた殺し…」
何やら針金細工はぶつぶつと独り言を言い出した。
「『…あの』」
「君は」
丁度千秋と針金細工の声が被った。しかし針金細工は構わず続ける。
「君は人殺しに罪悪感を抱いているかい？人を殺すことなんてまるで呼吸のようなもので、別になんとも思わないかい？人を、人間を、殺すか殺さないかの問題ではなく、ただ”殺す”存在として見ているかい？その人殺しに、理由はあるかい？」
矢継ぎ早の質問だった。千秋は落ち着いて、答える。
「『罪悪感なんて、ある筈が無い。何か思うわけが無い。感情も未練も何もない。どんな感情も存在しない。ああ、確かに人間は獲物だよ』」
「…うふ」
針金細工は笑い出した。高らかに。まるで、本当に面白いというよ

うに。
「そこまではっきり言い切るとは、いやあ、実に潔い！そうだ、そうだよ！君は紛れも無い私たちの家賊だ！うふふふ、ふふふふふふふ！」
ひとしきり笑い終えたあと、改めて針金細工は千秋を見る。
「私の名前は零崎双識という。君の名前は？」
「『九条千秋、英名クレア・クラウス』」
「千秋くんか、よし、今日から君は私たちの家族で私の弟だ！零崎一賊は君を歓迎しよう、新たな家賊だからね！」
「『零崎一賊…裏世界、殺し名序列第３位、”殺人鬼”零崎一賊。理由無く人を殺す、殺人鬼集団』」
「おや…そこまで知っているのか。どうやら君はなかなかどうして…普通じゃない。よし、そうだな…新たな家族には名前を付けないとね」
「『名前…？』」
千秋の問い返しに、双識はうんうんと頷いた。
「そうだな…よし、決めた。
君の零崎名は、零崎姫識。
うふふ…宜しく頼むよ、姫識くん」

この時。千秋…否、姫識は分かっていたのかもしれない。
この男が、自分と同じ性質を持つという事に。
こうして…殺人鬼、零崎としての千秋…
零崎姫識が、誕生した。

汀目俊希

九条千秋は零崎一賊の一員である。

「…誰だ？コイツ」

双識と千秋―否、姫識が会ってから数日後。姫識は、双識に連れられて彼の言う”弟”のところに来ていた。

そして、彼の弟に会った時の、その弟の第一声がこれである。

弟だという少年は、姫識と同じくらいの年の子供だった。ごく普通の少年に見えなくも無い。

右顔面に施された禍々しい刺青を除けば。

しかし、その瞳は深く、奥暗い、密度の濃い暗闇。深い、濁った底なし沼のような瞳の虹彩だった。

だが、姫識は少々ご機嫌斜めだった。

せっかくパソコンで色々な調べ物に興じようと思っていたところを、突然押しかけてきた双識によってここに連れてこられたのだ。

まあ暇なら余るほどある、と姫識は思うことにした。日本は義務教育だが、姫識はその限りではない。既に大学卒業までの資格を持っているからだ。

イコール、学校に通わなくてもいいということ。

にしても、双識はどうやって自分の住所を知ったのだろうと姫識は首をかしげた。

「紹介しよう、人識。彼は零崎姫識。数日前、新しく家賊に加わったんだよ。つまり、君の弟ということになる。同い年だから、仲良くしてやってくれ」

「え、男？嘘だろ？」

人識と紹介された少年は、千秋の顔をまじまじと覗き込んだ。

「あれー、どっかで会ったことない？なんか俺、見覚えある気がするんだけど」

「『初めまして、人識くん。僕は零崎姫識です。…本名は九条千秋ですけど』」
「九条…九条…ああ！あいつだ、なんか天才って言われてた奴！」
人識は驚いて姫識を指差した。
「道理でな。ニュースや新聞で騒がれてたもん、見覚えあるはずだよな。かはは、天才は実は殺人鬼だった、ってことか？」
「『そうなりますね』」
「そんじゃまー、自己紹介しとかないとな…俺は零崎人識、汀目俊希って名前で今学校にも通ってる。よろしくな」
姫識はちらりと、このやり取りを傍で見守っていた双識を見上げた。
「…うん？どうしたのかな、姫識くん？」
「『双識さ…双識お兄さん、人識くんも…零崎一賊なんですか？』」
「”双識お兄さん”…なんだか新鮮な気分だよ、弟にそうやって呼ばれるというのは…ああっと、いけないいけない。人識も零崎かということだったね。…そうか、姫識君には言っておいても大丈夫だろうな。実は、まだ人識は”覚醒”してはいない。”覚醒していない”というのは、まだ人を殺したことがないという意味さ。だけど、人識は少々特別でね…零崎同士の親近相姦で生まれた子なのさ。だから生まれながらにして零崎の名を持っている」
「『成る程』」
千秋は改めて人識を見た。
人識は完全に姫識に興味を持ったようで、きらきらした目で姫識を見ている。
「あーよかった！ようやくここにもまともそうな奴が来た！毎回毎回口うるさくて変態の兄貴じゃなく、まともそうで気が合いそうな同年代の奴が来てくれてほんっとーに助かったぜ」
興味を持ったわけではなかったらしい。
「『…そう、よかったね人兄』」
「ん？人兄？それ俺？」
姫識はこくりと頷いた。

そしてうむむ…と人識は唸る。
「そんな柄じゃねえけどなあ…」
「なっ、羨ましいよ人識！私なんて”双識お兄さん”というどこかよそよそしい名称なんだよ！？それをそんなに親しげに呼んでもらえるとは…しかもそれを断ろうとしているなんて勿体無い！」
さっきまでの呼び方にもなかなか好印象だったのに、変わり身の早い双識である。
「『…双兄？』」
「そう！それだよ！それでいい！これからは私のことはそう呼んでくれたまえ！それ以外はお兄ちゃん認めないよっ！」
「ちょ、兄貴！姫識見ろって！弟殺す気か！」
このあと完全に暴走した双識を止めるのに人識と姫識は酷く苦労したのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8413z/

零崎姫識の人類観察

2012年1月2日19時49分発行